連協道路ニュース

第363号

発行 横浜環状道路(圏央道)対策連絡協議会 事務局

(創刊 1988 .12.14)

Tel 090-4825-7174 http://renkyoueditor.web.fc2.com/

Mail: renkyoueditor@mail.goo.ne.jp

2019.12.01.

横環南線、横浜湘南道路 供用時期遅れ理由（続報）

連協道路ニュース 361 号(10 月 6 日発行)において筆者は、「遅れ理由について事業者は工事についての課題を上げているが、その内容を明らかにしていない、オープンにして世の中の審判を仰ぐべき」との指摘をした。理由について事業者は以下の理由としている。

●横環南線:

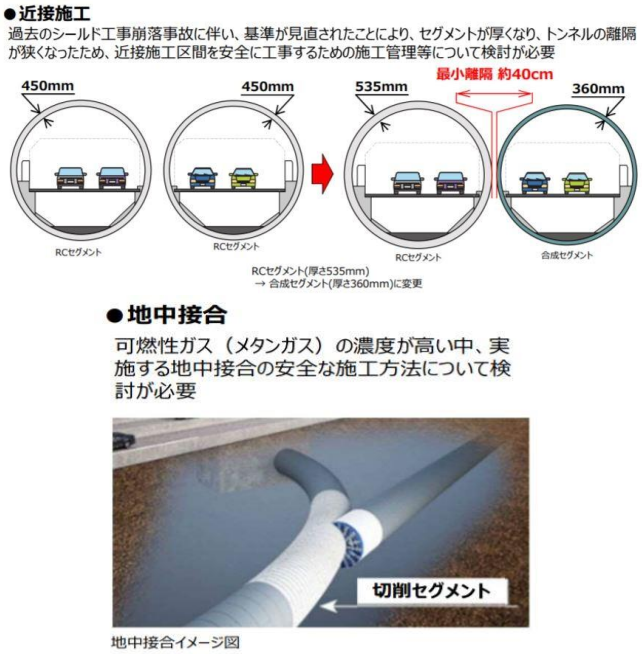
庄戸地区（神戸橋～旧庄戸小学校付近）の施工方法を開削工法から非開削工法への変更により低土被り部の安全に施工するための仮設方法等の検討。

図は全て
ネクスコ説明
資料より引用

http://www.ktr.mlit.go.jp/ktr_content/content/000754132.pdf

●横浜湘南道路：

本線トンネル区間では可燃性ガス（メタンガス）の濃度が高い中での地中接合の安全施工方法やセグメント厚変更による近接合区間の安全な施工管理等の検討。



（国交省資料より）

そもそも、事業者は 2014 年 3 月の用地の強制収用への事業認定説明会に際して「東京オリンピック年には供用開始」と嘯いていたのである。

その後 5 年も経た。工事状況は未だトンネルの掘削にも入っていない状況であり、誰が見てもオリンピック年に供用開始なんてあり得ない状況であることは明らかである。

今になって安全な施工方法の検討を遅れ理由に上げているが、もともと十分な事前調査の基に現場の実態に基づいた工事の設計が原点であり、基本的検討を疎かにしてきておいて、取って付けたような理由との印象を受ける。事業者の技術力に疑問を感じる者である。

（事務局長　長谷川誠二）

対外活動報告

11/21 国会公共事業調査会(仮称)準備会
　第８回(衆院第一議員会館、会長参加)

11/23~24 第 45 回道路全国連全国交流集会
　(あーすぷらざ、連協より 32 名参加)

道路全国連　４５回全国交流集会

「住民参加の道路事業」

―住民が主人公であったか、何を未来に伝えるか！―

第 45 回記念大会が 11 月 23-24 日に栄区「あーすぷらざ」で開催され、29 団体、78 人(延 115 名、連協 32 名)が参加した。

生憎の雨で視界は良くなかったが、昼から横環北線大黒 JCT、釜利谷 JCT、朝比奈 IC 経由で南線の庄戸・上郷・公田・田谷地区の工事地域をバスで見学した。

集会では、初めに横浜環状道路全線の現況報告があり、続いて北線の地盤沈下の事例が報告された。横浜湘南道路からは「工事進捗状況とトンネル区間でメタンガス濃度が高い状況にあり、施工方法やセグメント厚が変更になるなど安全な施工管理等検討が必要となった」と NEXCO 東日本の調整会議で発表されたとの報告があった。「岡山美作道路」からは、住民要望を無視し勝手にルートを選定した県行政への強い批判の報告があった。

（各地報告）

翌 24 日は道路全国連事務局長橋本氏から基調報告があり、「日本の道路戦前と戦後」、「極端な道路建設と東京一極集中」、「3 つの大震災そして市民、住民運動と今後の課題」が話された。

結論としては「これ以上新たな道路は必要ない」と断言した。なお橋本氏は今大会をもって事務局長を退き長谷川茂雄氏に交替することが発表された。

（会場風景）

特別報告では、東京外環、中部横断道路、名古屋環状 2 号、横環南の合同道路委からそれぞれの運動から学んだことや公害調停等が報告された。

午後は「巨大開発は人に何をもたらすか―高速道路、リニアの本質を考える」のテーマで慶応大学名誉教授、川村晃生氏から記念講演があった。

現代のスピード化で人に幸福をもたらすか？　TV、スマホなどいかに人間をダメにするかなど、歴史の中で利便性が追及され実現していく中でむしろ人間にとっては多忙となり、また考えることをしなくなった現代を歴史的に文明論で切捨てる内容であった。また公共事業による景観の問題等私たちに多くことを考えさせられるものであった。

分科会は 3 つのテーマに分かれて道路運動でうまくいかなかったこと、良かったこと今後の住民参加への提言が議論された。

各地での今までの経験を踏まえ、公共事業への住民参加のために、HP,SNS を始めとしあらゆる周知宣伝媒体を通じ、一般の方に問題の本質を知ってもらうことが重要であり、そのために何をすべきかが今後の課題と考えられる。

（分科会での議論）

以上、集会は全般的に住民運動の現状を明らかにし、熱心な討論が繰り広げられた。最後に「大会アピール」を採択し、次回の開催地東京に引き継がれ閉会宣言で散会となった。　　（副会長　高村信夫）